

明治期の『緋色の研究』、四人のシャーロック・ホームズ

——探偵小説翻訳史稿(3)——

吉田 司 雄

世界最初の探偵小説とされるエドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」¹⁾“The Murders in the Rue Morgue”、一八四一年)が日本で最初に翻訳されたのは、一八八七(明治二〇)年のことだと思われます。この年の一二月、「読売新聞」に竹の舎主人意訳の「ルー・モルグの人殺し」というテキストが掲載されます(一二月一〇日、二三日、二七日、三〇日)。竹の舎主人は根岸派の文学者として当時活躍していた饗庭篁村の別号で、彼は先にポーの「黒猫」(一一月三日、九日)も翻訳しており、日本の言論界で一人称の表現に強い関心が向けられていた時期でもありました。

エドガー・アラン・ポーが創設したミステリの基本構造では、物語の冒頭近くで「死体」が発見され、謎と恐怖が深まっていく過程を凡庸な語り手「私」が語ってゆき、容易には真相に辿りつけないことがサスペンスを高めていきますが、最後には名探偵によって事件が合理的に解明され、死体発見以前に起こった出来事は何だったのかというテキストの空白箇所が埋められます。²⁾ 饗庭篁村訳の

「ルー・モルグの人殺し」においても、どこまで自覚的であったかはさておき、一人称小説としての構造は忠実に翻訳されており、近代日本に本格探偵小説の形式が初輸入されたといえることができます。

しかし、日本の創作探偵小説においても直ちにこの表現構造が実現された訳ではありませんでした。翌々年の一八八九(明治二二年)、「日本探偵小説の嚆矢」³⁾とされる「無惨」という短編を黒岩涙香が発表します(『小説叢』第一冊、小説館、九月一〇日発行)。「モルグ街の殺人」のモチーフを継承しようとしたことが窺われ、³⁾「疑団(上篇)」「付度(中篇)」「氷解(下篇)」の三部構造を採るなど、「無惨」には「日本探偵小説の嚆矢」にふさわしい要素が含まれてはいますが、「モルグ街の殺人」のように語り手の凡庸な「私」によって事件が記述される訳ではありません。加えて、当時の読者が好んだのは、同じ黒岩涙香の手によるものでも、「法廷の美人」(『今日新聞』一九八八年一月)を始めとする外国小説の翻案テキストだったのです。

ほどなく翻案探偵小説の人氣を意識して、「探偵小説」と角書にある小説が量産されるようになりますが（尾崎紅葉を中心とする硯友社グループが「探偵小説退治」を標榜して、自分たちも「探偵小説」創作に乗り出したことは象徴的です）、この時期の「探偵小説」は探偵こそ登場するものの、「モルグ街の殺人」が創始した本格謎解きミステリの構造を意識したものではありませんでした。それどころか、「モルグ街の殺人」が明治三〇年代に再び日本語に置き換えられたとき、探偵小説の常識からはありえないことが起こります。長田秋濤は「狸々怪」というネタバレのタイトルを付け、しかも「怪談」というジャンルの作品として提出したのです。フランスからの帰朝者であった長田秋濤が「此怪談は予が嘗て巴里に居つた時分、人から聞いた話」で、これからその「実に奇々怪々の話」を紹介すると言う冒頭のスタイルから分るように、この小説の眼目は謎解きではなく、海外実話の怪談とされたのでした。⁽⁴⁾

同じようなことがシャーロック・ホームズの移入史においても起こります。アーサー・コナン・ドイルの作品が初めて日本に紹介されたのは一八九四（明治二七）年、「日本人」という雑誌に掲載された「乞食道楽」だと思われませんが、「神学」を「地質学」、ド・クインシーの作品のことを「人種談」としたりと誤訳が目立つものの、「予」（ワットソン）が「シャーロックホームズ」の活躍を語るという形式は忠実に踏まえられています。⁽⁵⁾しかし、明治日本の読者にホームズ・シリーズの魅力を伝えたのは、一八九九（明治三二）年の「中央新聞」に水田南陽が『シャーロック・ホームズの冒険』

（“The Adventures of Sherlock Holmes”、一八九二年）を翻案連載した「不思議の探偵」でした。⁽⁶⁾この作品にはホームズもワトソンも登場しません。舞台は「独逸伯林」に置き換えられ（しかし登場人物名は日本人で）、名なしの「大探偵」の活躍を「医学士」の「私」が語るというスタイルでした。そして「まだらの紐」が「毒蛇の秘密」という題になっているように、ここでも「狸々怪」同様、謎解きミステリの形式性よりも南方の異境の地から来た動物が引き起こす恐怖の方に力点が移されてしまっています。

さて、このような状況にあった明治時代に、ホームズが初登場した長編『緋色の研究』（“A Study in Scarlet”、一八八七年）が四度日本語に置き換えられています。

一八九九（明治三二）年

無名氏訳「小説血染の壁」（『毎日新聞』四月一六日～七月一〇

日、八十四回）

一九〇〇（明治三三）年

抱一庵主人（原抱一庵）「新陰陽博士」（『文章倶楽部』九月

一九〇一（明治三四）年

〔森〕皚峰訳「モルモン奇譚」（『時事新報』一一月三日～一

九〇二年一月二九日、八十八回）

一九〇六（明治三九）年

風葉山人（小栗風葉）訳「神通力」（『読売新聞』一一月一三

日～一二月八日、二十六回）

だが、これらはいずれも今日普通に読むことのできるような忠実な翻訳ではありませんでした。四作は、原作通りロンドンを舞台にホームズが活躍するものと、日本を舞台にし登場人物も日本人名に置き換えた翻案とに分けられます。前者にあたる「新陰陽博士」は、「年来の知友なる英国の医家エツチ、和杜遜氏^{ワットスン}より一冊の筆記に添て新春早々寄せ到れる一翰」を冒頭に引用しています。ワトスンは訳者の友人として実体化され、ここでも「狸々怪」同様の実話化がはかられている訳です。「明治三十三年」に受けとった物語とする必要上から、原作の作中時間にも変更が加えられます。周知のように、コナン・ドイルの原作小説におけるワトスンは、一八七八年にロンドン大学で医学博士の学位を取り、さらに軍医の資格をとるためにネットリーの陸軍病院で研修を積んだ後、軍医補としてインド駐屯中のノーサンバランド・フュージャリア連隊第五大隊に配属されます。しかし、ワトスンの任地到着前に第二次アフガン戦争（一八七八年〜一八八〇年）が勃発し、カンダハルで連隊に追いついた彼はこの後バークシャー連隊に転属となり、マイワンドの戦いに赴くことになります。第二次アフガン戦争は、アフガニスタン王シエルIIアリが南下政策をとるロシアと接近をはかる一方でイギリス使節の受け入れを拒否したことに對し、イギリスが軍事侵攻したことから始まった戦争です。まもなくシェリIIアリが死亡、長男のヤクブIIカーン、ついで甥のアブドゥルIIラフマンが王位につき、ラフマンはイギリス側の条件をのんで和平の道をとろうとしますが、それに反発した先王の次男であり現国王の従弟であるアユブIIカーンが

反乱を起こし、イギリス軍を迎え撃って潰走させたのがマイワンドの戦いでした。総勢二四七六名のイギリス軍は、戦死者九三四名、負傷者及び行方不明者一七五名という大打撃を被ったと言われています。ワトスンもこの戦場で左肩の骨を砕かれ、鎖骨下の動脈を負傷します。さらに基地病院での療養中に、インド領の風土病として恐れられていた腸チフスに感染します。いったんは苦杯をなめたイギリス軍でしたが、一年後にはアユブIIカーンの反乱軍も鎮圧され、結果的にイギリスはアフガニスタンを事実上植民地とすることに成功します。ワトスンが言うように「この戦争は多くの軍人に勲章と昇進の機会をあたえた」のですが、すっかり弱りはてた体で一人ロンドンに戻ってきた彼は、イギリスの帝国主義的植民地主義的野心の実現から名実共に弾き飛ばされた弱者だったのです。ジェンダー論的に言えば、男らしい軍人として何の成果をあげることもできず、非II男性ジェンダー化されたワトスンの手で、植民地からの搾取によって繁栄を謳歌する大英帝国の首都ロンドンの暗部に棹差す物語を書き綴らせるというのが、ホームズ・シリーズの基本設定でした。

しかし、「明治三十三年」に執筆時間を設定した以上、「新陰陽博士」で和杜遜^{ワットスン}が従軍する戦争は第二次アフガン戦争のままといい訳にはいきません。和杜遜^{ワットスン}の手記は次のように始まります。「昨一千八百九十九年第十月杜国戦争の開始するや、余はチャームサイド將軍の率ゆる第十四旅団衛生隊の臨時傭医員として戦地に赴けるが、ボーア兵予想の外に強武にして吾軍屢ば利あらず、コレンソウの役

にて吾兵の戦死者八十二名、負傷者六百六十七名、行方不明のもの三百四十八人に及び、余も同役に於て右肩を負傷し、他を治療すべき身の却りてレデースミツスの本拠病院に他の治療を受けること、なりぬ」。ボーア (Boer) 人は南アフリカのオランダ系白人ですが、一八世紀以降南アフリカへの植民を進めるイギリスと対立を重ね、一八九九年イギリス軍がボーア人のトランスバール共和国及びオレンジ自由国を侵略したことで、ついに戦争が勃発しました。当時の日本は、ロシアと協商条約を結んで極東における利害の調整をはかろうとする伊藤博文らの日露協商論と、イギリスと組んでロシアを牽制しようとする山縣有朋らの日英同盟論とに揺れており、南アフリカでのイギリス軍の戦局も大きな関心事でした。武力に優るイギリスは一九〇〇年五月にオレンジ自由国併合、九月にトランスバール共和国併合を宣言しますが、ボーア人はその後もゲリラ戦で抵抗を続け、ゲリラ一掃のために村落に火をかけたり一般人でも強制収容所に入れたりといったイギリス軍の残虐な行動は世界の世論から批判を浴びました。一九〇二年五月南ア戦争は終結しイギリスは南アフリカを支配下に治めますが、それとほぼ時を同じくして一九〇二年二月日英同盟条約が締結されることになります。帝国主義植民地主義戦争とワトスンとを関わらせるという点で、この修正はなかなか見事だと言えるかも知れません。しかし、『緋色の研究』というテキストにおける植民地主義という主題の重要性を十分理解した上での修整であつたかと言えば、やはり否と言わざるを得ないでしょう。なぜなら、『緋色の研究』の原作は次のような二

部構成になっていました。

第一部 元陸軍軍医・医学博士ジョン・H・ワトスン回想録の再録

第二部 聖徒の国

そして、第二部の「6 ドクター・ワトスン回想録のつづき」で再びワトスンによる一人称の手記形式に戻るまでの、第二部の1～5は、犯人がなぜ二人の男性を復讐のために殺害するに至ったのか、が三人称小説の形で「聖徒の国」＝植民時代の北アメリカ西部を舞台として叙述されています。大英帝国の首都ロンドンで起こった残忍な事件のそもその原因は、イギリスの外部＝植民地化されてゆく空間にこそあるのだという物語の論理の、言ってみれば前振り(伏線)にワトスンの帝国主義戦争体験は置かれていたからです。ところが「新陰陽博士」では、この第二部1～5の三人称形式の部分が訳述されませんでした。殺人の動機はすべて捕獲後の犯人の独白の中で説明され、しかも「二十二年前余は羅^ラ児と呼べる一少娘を娶るべかりき、そを、権あり富あるドレッツパーは余の手より握ひぬ、悪人の手に落ちたる羅^ラ児は哀み死せり、娘の死を哀みて羅^ラ児の父も死せり、悪人ドレッツパーは実に二個の殺人者なり、ドレッツパーに媚ぶるがためにドレッツパーの邪なる行を幫助せるものは渠の書記スタンガンなり、スタンガンの罪はドレッツパーと相同じ、而して二悪人を法律は罰することなし、之を罰し之を刑するものは余即ち

ツファアソン、ホープなり」という具合に、個人的な怨恨にすべてが回収されてしまいます。このことは「新陰陽博士」が、犯行動機へとつながる原作のメロドラマ的要素をすべて捨象し、「直覚力」によって難事件を解決する「ホルムス」の「魔法者」のような活躍に焦点をあてて再編されたテキストであることを端的に示しています。「陰陽博士」とは中国伝来の陰陽五行説に基づいて占朴をたてるなどした宮中の役職名であり、呪を解いたり鬼や魔物を退治したりする、平安時代のゴーストバスターズとも称すべき存在でした。「化学室」^{ラボトリー}での実験や犯行現場での観察に基づいて難事件を解き明かす「ホルムス」とは、文明開化の世に登場した新しい「陰陽博士」なのだというメッセージがこのタイトルには込められています。

これに対し、一九〇一（明治三四）年の「モルモン奇譚」では「新陰陽博士」でカットされた第二部1〜5がきちんと翻訳されています。ただし、時系列順に物語は再編成され、幼子を連れて荒野を彷徨う男性がモルモン教団の一行と出会う場面から始まります。そして、連載二十九回めで「ファアリーア親子の、共に果敢なくその命を殞としたは、既に過ぎつる千八百六十年、今は略ぼ二昔の月日を経て、爰に千八百七十八年、倫敦大学より医学士の称号を授けられた、ワットソンと云へる男があった」と原作の冒頭箇所と接続しますが、第二部をそのまま引き継いで、この後もすべて三人称形式で記述されていきます。訳文自体は原作にほぼ忠実で、ホームズがワトスンに、デュパンやレコックの探偵振りを批判的に語る箇所なども訳出され、ドイルが「其主人公シャーロック ホームスを仮り世

界有名の作家米のボー仏のガボリオを罵倒する所痛快なりと云ふべし」と訳者の注記まで添えられている（第四十二回）のですが、しかしワトスンの回想録という形式は完全に破棄されています。それゆえ「モルモン奇譚」しばしば、「訳出の態度は大いに遺憾であった」（中島河太郎『日本推理小説史』一九九三年、東京創元社）と言われてきました。しかし、問題はむしろ、原作の一人称形式が日本語訳としては三人称形式で十分叙述可能であったという点でしょう。

実は同じような問題を、日本に舞台を移した翻案小説からも見出すことができます。一九八九（明治三二）年の「血染の壁」では、ホームズは小室泰六、ワトソンは和田進一となっています。日本人である以上、第二次アフガン戦争で負傷という訳にはいきませんが、「我、軍医和田進一は日清の戦役に従ひて、医務に執掌し、平壤の役、旅順の戦ひ、幾百の負傷者のために、一身を棄て、其治療を加めしも、其後台湾に赴きて、終に匪徒のために狙撃せられ、左腕に負傷なしたる」となっていますが、一人称「われ」による記述という点は原作通りです。ところが、一九〇六（明治三九）年の「神通力」ではすべて三人称記述となっているのです。「和田真吉が福岡の大学を卒へて、医学士の肩書を取つたのは三年前、明治三十六年の冬で」あり、卒業後「飄然海を渡つて、清国四川省の某地に現れた渠は、不幸なる未開人の間にも、進歩した西洋医術の恩沢を分けやう、而して、希くは自分も相当の蓄財を為やう」と試みるが、「其地の庸医等は、卑屈にも土民の迷信を嫉かして、渠を恐るべき魔術者と呼び、或ひは外国の間者だなどと言触したので、頑民の群

は大挙して渠の住宅を襲つた」とあるように、ワトスンと和田眞吉は軍医ではなく戦争で重傷を負う訳でもありません。未開野蠻の地で挫折した和田医学士が再起を期して初めて上京した東京で出会った、新たな科学の使徒がホームズと堀見猪之吉なのです。「神通力」は翻訳として考えるならば極めて不完全で、原作第二部は訳出されず、築地居留地で外国人を連続殺害した犯人が堀見のところまでやってきて「犯人は此男だ！」と言いつたされる場面で、物語は唐突に幕を閉じます。犯人の自白も堀見が推理を披露することもないのみならず、犯行動機自体が原作から改変され、堀見が一方的に言い募るのを犯人は「黙って、突伏して」聞くだけなのです。読者には堀見の科学的分析的な推理力よりも超人的な「視察力」(スーパーナチュラな「神通力」)だけが印象づけられます⁽⁹⁾。

それに対し「血染の壁」では、原作の北アメリカが北海道に移される形で事件以前の過去が叙述された後、再び「われ」の一人称に戻りますが、ここから先の推理の跡づけの部分が原作以上にふくらまされています。ホームズと小室泰六はワトスンと和田進一に、事件の解決以前に真相を掴んでいたことを示す証拠として「一冊の手帳」を自慢げに見せ、さらに犯人の名前を事前に知っていた訳を問われて「幾多の古新聞の切抜」を貼った「一冊の貼込帳」を見せます。探偵が真相を暴露する以前に、読者にもすべてのデータが明らかにされていなければならないとする本格謎解きミステリの原則からすれば明らかにルール違反だと言いたくなるような箇所ですが、小室泰六が優れた探偵であることを強調するために行われた

処理でしょう。加えて、別の事件(『シャーロック・ホームズの冒険』収録の「消えた花婿」)の話まで最後に出てくるのですが、問題はこれらがほとんど小室の独白の形で記述されていることです。和田進一は単なる聴き手のポジションに据え置かれ、すっかり影が薄くなってしまっています。

コナン・ドイルの創造した名探偵シャーロック・ホームズの大きな属性は、ホームズ自身も文章を書く人物であるという点でした。実際、『緋色の研究』でワトスンは新聞に載った「人生の書」という見出し付きのホームズの文章を読んでおり、『四つの署名』にも「各種煙草の鑑別について」という論文のことが出てきます。それゆえホームズは、ワトスンがまとめた『緋色の研究』を、探偵という厳密な科学をロマンティズムで染め上げたと批判し、「あの事件で書くに値するのは、結果から原因に遡る不思議な推理を用いて、僕がいかに解決に到達したかという点だけだ⁽¹⁰⁾」と言い募るのです。しかし、ホームズ本人がいかに強弁しようとも、ワトスンの手による物語の再編なしにはホームズの推理力が広く知れ渡ることにはなかつた。文筆家としてのホームズはワトスンに完敗するのであり、『緋色の研究』でワトスンが作ったホームズの知識に関するリストの冒頭が「文学の知識 ゼロ」となっているのも、当然といえば当然なのです。

しかし、明治期の日本で『緋色の研究』が訳出・翻案されたとき、これが書き手であるワトスンの存在なしにはなりたたない作品だとは必ずしも受け止められなかつた。「直覚力」「視察力」に長けた

ホームズ役の卓越振りが強調される一方で、ワトスン役は名探偵を際立たせるためのサブキャラクターになりさがり、それゆえホームズ役のほしきままの独白を甘受したり、三人称形式で脇役の一人として叙述されたりしなければならなかった。このことは長く日本の創作探偵小説にも影響を与えてゆきます。同伴者の「私」の役割を明確に意識した創作の登場は、一九二五（大正一四）年一月、「新青年」誌に発表された江戸川乱歩「D坂の殺人事件」を待たなければなりません。いや、それ以前の一九二〇（大正九）年に芥川龍之介が「未定稿」（「新小説」四月）という作品を発表しているのですが、それが未完に終わっているところに、この問題の日本における困難さが象徴的に現れています。明治期の『緋色の研究』四種四様の翻訳翻案が投げかけてくる問いは決して小さくはないと思うのです。

註

- (1) 小森陽一「構造としての語り」（一九八八年、新曜社）に、創作・翻訳を問わず一人称小説ブームと呼べるほどに一人称の表現形式への関心が高まった明治二〇年前後の状況、および篁村訳「黒猫」「ルー・モルグの人殺し」の表現構造に関する詳しい分析がある。
- (2) 「蓋し、我国探偵小説の嚆矢たり」との慧句が「絵入自由新聞」一八八九年九月二三日の発売公告にあり、翌一八九〇年二月上田屋から刊行された『無惨』の梅酒屋かほる「序文」にも「日本探偵小説の嚆矢とは此無惨を云ふなり」とある。
- (3) 内田隆三『探偵小説の社会学』（二〇〇〇年、岩波書店）に、「『無惨』という作品がその重要なモチーフの多くにおいて、ポーの古典的探偵小説『モルグ街の殺人』を模倣した習作のようになってい」るとの指摘がある。
- (4) 拙稿「エドガー・アラン・ポー『モルグ街の殺人』ノート——探偵小説翻訳史稿（1）——」（「工学院大学共通課程研究論叢」第37—1号、一九九九年一〇月三〇日）で論じた。
- (5) 日本最初のホームズ物翻訳として「乞食道楽」を発見したのは、畑實「シャーロック・ホームズの訳」「乞食道楽」について（「文学年誌」第六号、一九八二年四月二五日）。拙稿「コナン・ドイル「唇のねじれた男」ノート——探偵小説翻訳史稿（2）——」（「工学院大学共通課程研究論叢」第38—1号、二〇〇〇年一〇月三一日）でも触れた。
- (6) 南陽外史（水田南陽）訳「不思議の探偵」（「中央新聞」一八八九年七月二日〜一〇月一日、一〇月二日〜一〇月四日）は以下の課題で、「シャーロック・ホームズの冒険」（「The Adventures of Sherlock Holmes」）収録作を翻案している。
- (7) 「毒蛇の秘密」（「The Speckled Band」）「まだらねの紐」（「奇怪の鴨の胃」）（「The Blue Carbuncle」）「青いガネット」（「帝王秘密の写真」）（「A Scandal in Bohemia」）「ボヘミアの醜聞」（「禿頭俱樂部」）（「The Red-Headed League」）「赤髪連盟」（「紛失の花婿」）（「A Case of Identity」）「消えた花婿」（「親殺の疑獄」）（「The Boscombe Valley Mystery」）「ボスコム谷の惨劇」（「暗殺党の船長」）（「The Five Orange Pips」）「オレンジの種五つ」（「乞食の大王」）（「The Man with the Twisted Lip」）「唇のねじれた男」（「片手の機関師」）（「The Engineer's Thumb」）「技師の親指」（「紛失の花嫁」）（「The Noble Bachelor」）「独身の貴族」（「歴代の王冠」）（「The Beryl Coronet」）「緑柱石の宝冠」（「散髪的女教師」）（「The Copper Beeches」）「ブナ屋敷」池田浩士『海外進出文学』論・序説（一九九七年、インパクト出版会）の序章「異郷、謎の源泉——探偵小説が描いた海外進出」に言及がある。
- (8) 『緋色の研究』の引用は、ハヤカワ・ミステリ文庫版（大久保康雄訳、一九八三年）に拠った。
- (9) ホームズを「神通力」の持主と捉える見方は明治期には決して例外的なものではなかったように、風葉山人「神通力」の翌年、一九〇七（明治四〇）年一二月にも天馬桃太「神通力」という訳書が刊行されている（奥付には著作者本間久四郎とある。「田紳郎」『海軍条約』「妙な患者」「乞食紳士」の四作が収録されており、原作はいずれもホームズ物の「ライゲート」の大地主「海軍条約文書事件」「入院患者」「唇

- のねじれた男」。
- (10) 『四つの署名』の引用は、ハヤカワ・ミステリ文庫版(大久保康雄訳、一九三八年)に拠った。

※本稿は、二〇〇九年八月一八日(二一日)にカナダ・バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された日本文学研究学会(Association for Japanese Literary Studies)第一七回大会でのパネル発表「Murdering the Original—Corpses and Translations in Modern Japanese Literature」(中村美理、吉田司雄、野坂昭雄、押野武志)での報告「Detectives Standing Still—The Sherlock Holmeses of the Meiji Period」の原稿を元に成稿したものです。

(よしだ もりお 本学教授)